

Deck Stage MADAI TENYA

扱いやすさと軽量高感度が自慢  
**NEWデッキステージ マダイテンヤ**

●がまかつの船竿デッキステージシリーズに新しく仲間入りしたのが「デッキステージマダイテンヤ」だ。今や全国に普及した一つテンヤマダイ釣法に特化、扱いやすさを重視したスタンダードモデルでありながら軽量、高感度がシャープな操作性を追求している。バットの強さと穂先の感度、しなやかさはフラッグシップモデル「がま船ひとつテンヤ真鯛Ⅲ」のDNAを受け継ぎ、初心者からベテランまで、全国どの釣り場にも対応できる。好評発売中。



▲アイテムはM、MH、Hの3種

▲感度のよいカーボントップ採用

タイプ	標準全長 (m)	希望本体価格 (円)	標準自重 (g)	仕舞寸法 (cm)	使用材料 (%)	モーメント	継数 (本)	先径 (mm)	錘負荷 (号)
M	2.5	28,500	118	130.5	C99.0 G1.0	7.3	2	0.8	1.5~12
MH	2.5	29,000	123	130.5	C99.0 G1.0	7.6	2	0.8	3~15
H	2.5	29,500	125	130.5	C99.0 G1.0	7.8	2	0.85	6~25

※C=カーボンファイバー、G=グラスファイバー。※モーメント=標準自重(kg)×竿尻から重心までの長さ(cm)。※上記の釣竿にはエポキシ樹脂を使用

**NEW 桜幻鯛テンヤII**

●人気の桜幻鯛テンヤTGの鉛バージョンと呼べるコストパフォーマンスに優れたモデル。フッキングパワー伝達力が優れたゼロアングル設定、新設計専用フック採用、ワンタッチエビキーパー搭載、8色展開。6、8、10、12、15号の5種。メーカー希望本体価格750~870円



▲カラーバリエーションは8色と豊富

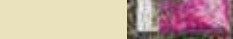
**桜幻鯛テンヤTG**

●すでに一つテンヤマダイの定番テンヤになりつつある人気商品。ヘッドに高比重タンクステンを採用し、素早い沈下と高感度を実現。全7色。6、8、10、12、15、20号の6種。メーカー希望本体価格は1250~2750円



▲がまかつからは「桜幻鯛テンヤ替え孫釣」フロロカーボンとPEハリスの2種を用意

▶「桜幻鯛テンヤワンタッチエビキーパー」も新しく発売された



▲これまでにない重量感だったが「引きがおかしいな」と濱中さん



▲三石さんは1キロ級のマダイも釣って竿頭に  
▶特大ウツカリカサゴでした  
▲濱中さんと同時ヒットしたのは2キロ級のマハタだった  
▼納竿間際にきた大ダイの当たり。濱中さんも竿を置いて見守る



扱いやすさ優先の新製品登場  
**デッキステージマダイテンヤ**

▶新登場、デッキステージマダイテンヤとともに実釣チャレンジ

★スタンダードモデルでありながら「ひとつテンヤ真鯛Ⅲ」のDNAを受け継いだ最新テンヤロッド

**三石忍、濱中怜雄** Gamakatsu  
**外房大原沖のテンヤマダイに挑む**  
**シケの海から大ダイのプレゼント**



▲三石さんは桜幻鯛テンヤTG15号、オレンジゴールドでスタートする  
▼濱中さんは桜幻鯛テンヤII15号、オレンジゴールドに竿はデッキステージマダイテンヤH

●濱中 怜雄 (はまなかれお) 21歳。がまかつフィールドスタッフ。東海大学海洋学部海洋生物学科4年。7歳のとき祖父とニジマス釣りに行き、釣って食べることに感動して以来釣りが趣味に。以後、釣り好きな父と横須賀からアジ釣り、運河でシーバス、メバリングなどに通う。今、一番ハマっているのは東京湾のテンヤタチウオ。



●東京湾、三浦半島周辺のマダイは乗っ込み後半戦、これからは外房~茨城県海域がアツくなる。当地のマダイ釣法のメインとなるのが一つテンヤ、といえは三石忍さんと、がまかつのマダイテンヤ竿のコンビ。今回は新しくがまかつフィールドスタッフに加わった濱中怜雄さんとニューロッドを携えて外房大原沖に繰り出した模様を紹介する。

船中で1枚目上がった7時過ぎ、三石さんが初めての本命らしきアタリをとらえてヤリトリを始める。上がったのは1キロ級だったが、ここまで船中最大クラス。すぐに三石さんは濱中さんに当たりパターンやテンヤセレクト(桜幻鯛テンヤTG20号へ)のアドバイス。少しずつつアタリを出せるようになった8時過ぎ、濱中さんが大きく竿を曲げた。と、同時に三石さんの竿も曲がる。同時ヒットだ。ところが、「ちょっと引きがおかしいな」と三石さん。濱中さんは40センチ級のウツカリカサゴ、三石さんは2キロ級のマハタに2人して苦笑い。その後ポツポツとアタリはあるものの上がってくるのはゲストばかり。何度かマダイらしきアタリもあったが、食いが浅いのかバラす場面も。そして11時前、最後の流しに突入した直後、三石さんが、「きたー、これは大きいぞ!」と声を上げる。速い潮にも押され、ジリジリと響くドラッグ音とともに道糸が引き出される。数分のヤリトリの末に取り込んだのは3キロの大ダイだった。結局、その後はアタリなく11時半の納竿を迎え、数型とも三石さんの独り舞台といえる釣行だった。「新製品の感触も十分味わえたし、大ダイのヤリトリも見られて、とてもいい勉強になりました」と濱中さん。「デッキステージは私のノウハウも詰まった竿、経験を積んで使い込めばいいパートナーになるはず」と三石さん。2人とも満足した表情で釣り場をあとにした。

初めての口々に臨む濱中怜雄さんはやや緊張気味の表情。弱冠21歳。経験値の浅い釣り物、初めての地となれば無理もないが、三石忍さんという心強い味方、加えてがまかつの新製品「デッキステージマダイテンヤ」を持参している。大船に乗ったつもりで……とはまさにこのことだろう。さらに乗船したのは周年マダイ一筋の頼れる船宿、外房大原港の富士丸である。緊張感を払拭するステージは完璧に整ったと思われた。4時半に出船し、40分ほど走って真潮根の水深70メートル前後に到着。ここで大きな障害に遭遇する。高いウネリと強い風に加え、2ノット近い速潮である。濱中さんが選んだのは3アイテムあるデッキステージマダイテンヤのHに、同じく新製品「桜幻鯛テンヤII」15号である。三石さんもこの組み合わせには合格点を与える。潮上に向かってテンヤを投げ入れるが、底打ちとともに道糸は大きくトモ側に押し流される。春の外房沖ではよくあるケースだが、乗っ込み大ダイはそんな所にこそ潜んでいるのだ。開始30分ほどで濱中さんがアタリをとらえたが、残念ながらフックアウト。本命らしき引きだっただけに実に残念なシーンだった。ここ数日のシケで水温も下がったように、マダイの食いは想像以上に渋い。潮上に向かってテンヤを投げ入れるが、底打ちとともに道糸は大きくトモ側に押し流される。春の外房沖ではよくあるケースだが、乗っ込み大ダイはそんな所にこそ潜んでいるのだ。開始30分ほどで濱中さんがアタリをとらえたが、残念ながらフックアウト。本命らしき引きだっただけに実に残念なシーンだった。ここ数日のシケで水温も下がったように、マダイの食いは想像以上に渋い。